

令和3年度 厚生労働行政推進調査事業費補助金（慢性の痛み政策研究事業）
分担研究報告書

慢性疼痛診療システムの均てん化と
痛みセンター診療データベースの活用による医療向上を目指す研究

研究分担者 加藤 実 日本大学医学部麻酔科学系麻酔科学分野 准教授

研究要旨

当院の集学的痛みセンター外来は2020年4月で新設8年目を迎えた。当院の特徴は新設時から全ての患者に対して、患者の訴えを受けとめ信頼関係の構築を第一に、心理社会的要因の抽出、身体的要因と新たに抽出された要因の関連性について患者と情報共有、そして痛みの原因と対応法の提案を介して、患者自身の痛み対応力を引き出すために看護師、薬剤師、精神科医、ペイン医の順番でナラティブアプローチを用いた診察スタイルを実践してきた。看護師は、患者の辛さを受けとめ、労い、理解、加えてその辛さの原因を訊ねる関わりを通じての信頼関係の構築のために力を注ぎ、加えて慢性痛の身体的要因の修飾因子である隠れていた心理社会的情報の発見、そして患者へ両者の関連性の気づきの提供の役割を担っている。今年度はよりスムーズな医療連携を目指しての痛みマネージャーの導入、集学的診察を担う各職種の後継者の育成のためのオンラインリレー研修会、そして患者の主体的な痛み対応に繋がる痛み教育の啓発に力を入れた。

A. 研究目的

痛み治療の専門医療機関を受診したにも関わらず、器質的な原因が見つからず、日常生活に支障を来している多くの慢性痛患者がいる。当院の痛みセンターを受診する患者も、長く続く原因不明の痛み、家族、職場、友人からも理解されない痛み、更に医療機関での傷つき体験から医療不信満載の状態です辛さを訴えて来院される。当院の痛みセンターでは、この患者の抱える辛さの受け止め、労い、理解を示し、加えてその辛さの原因を訊ねる関わりを通じての信頼関係の構築のために、第1診察者として看護師診察を設けてきた。しかし、本邦の他の痛みセンターでの看護師診察導入は少ない。当センター開設時は、緩和ケアチーム看護師1名から始まり、慢性疾患専門看護師が加わった。更に、2019年4月から痛みセンターの名称を、院内院外を含めて非がんとがんの全ての慢性痛患者を対象とし

た部門として、あらたに、緩和ケア・痛みセンターに変更した。その結果、緩和ケアチーム看護師であるがん看護専門看護師、緩和ケア認定看護師も加わり、継続的な人材教育が可能になっている。

更に、今年度はよりスムーズな医療連携を目指しての痛みマネージャーの導入、集学的診察を担う各職種の後継者の育成のためのオンラインリレー研修会、そして患者の主体的な痛み対応に繋がる痛み教育の啓発に力を入れた活動を実施したのでその詳細について報告する。

B. 研究方法

当院の多職種集学的痛みセンターでは、全ての新患患者に対して看護師、薬剤師、精神科医、ペインクリニック医師が順次診察を行い、集学的に患者を評価し、個々の患者が抱えている問題点を明らかにし、問題点に対す

る対応と痛みの対応法についての情報を提供し、患者に痛みの原因や痛みのメカニズムについての理解と気づきを促し、原因に対応した具体的な痛み対応法を提示している。今年度は、当センターを受診された患者に必要な痛み対応法の実施医療機関、あるいは患者の意向に応じた医療機関の選定するために診察時間帯に医療マネージャーが外来に同席した。

また、集学的診察を担う各職種の後継者の育成のためのオンラインリレー研修会を計5回シリーズで実施した。加えて、患者の慢性痛の理解を深めるための教育資材を作成した。

(倫理面への配慮)

これらのデータ収集については、当院の臨床研究審査委員会にて審査を受け承諾を受けている。

C. 研究結果

1) 痛みマネージャー

痛みマネージャーは毎週木曜日の痛みセンター外来に9時から17時まで勤務し、診察医師の指示のもとで、再診患者並びに新患患者の痛み対応に必要な地域の連携医療機関の情報収集、医療機関受け入れ可能の有無を調べ患者及び家族に提示する支援をしました。加えて、患者の住まいや職場など患者が希望する地域でのペインクリニック医療機関、リハビリ医療機関、メンタルサポート医療機関を調べ、該当する医療機関で当センターからご紹介する患者対応が可能か否かの確認業務をした。

2) 集学的リレーオンライン研修会

多職種リレーオンライン研修会（視聴型のウェビナー形式）は職種毎、看護師、薬剤師、精神科医、ペインクリニック医、作業療法士、そして地域医療機関のペインクリニック医とし10月から2月までの月1回19時から20

時までの1時間で実施した。

3) 患者の慢性痛の理解を深めるための教育資材の作成

患者の慢性痛に対する理解を深める目的で、第1に当院の集学的痛みセンターの診察内容の可視化を目的にしたイラスト入りのリーフレットを作成した。第2に患者さんと医療者間の信頼関係構築後に痛み対応を患者さんと医療者の痛みについて共通情報基盤作りを目的に長引く痛みで困っている慢性痛の患者さんが慢性痛についての理解を深めるためのイラスト入りのリーフレットを作成した。第3に成人版に加えて、子ども慢性痛患児を対象として、取れない痛みで困っているお子さんが慢性の痛みを正しく理解するためのイラスト入りのリーフレットを作成した。第4に慢性痛対応における薬物の位置づけについて、薬剤師からのメッセージというイラスト入りのリーフレットを作成した。最後に慢性痛に対する運動療法の意義と留意点について、作業療法士からメッセージというイラスト入りのリーフレットを作成した。当センター初診時にこれらリーフレットの概要説明は診察者が絵を描いて患者さんに説明し、これらの教育リーフレットは、帰宅後に痛みに対する理解を深めるための一助として患者さんに渡している。

D. 考察

痛みマネージャーの参加は、患者の痛み対応の医療連携の質の向上に寄与できる可能性が考えられた。集学的リレーオンライン研修会は、多職種の医療従事者の参加を得て、各職種は慢性痛患者に対する集学的診察の意義の理解に加えて、集学的診察に関わりたいとの声を多く聞くことができた。リーフレットの作成により、痛みセンターの診察内容の可視化、慢性痛の特殊性の可視化に繋がり、患

者さんの理解の深まりと不安、恐怖の軽減に繋がる可能性が考えられた。

neuropathic pain: Expert Opin Pharmacother. 2021 Aug 25:1-12, 2021

E. 結論

慢性痛患者を中心に据えた医療環境の質を向上させるために、1) 痛みマネージャーの導入、2) 多職種リレーオンライン研修会医師診察だけでは問題解決の糸口がみつからず、痛みの原因の同定が困難で痛み対応に苦慮している慢性痛患者に対して、集学的に多職種診察の看護師診察を契機に、痛みの原因あるいは患者自身が気づいていない痛みの修飾因子が判明し、痛み対応について患者に新たな気づきが生じ、患者の理解と納得が得られ、痛み対応の方向性を見出せ、治療を通じて痛みの軽減と日常生活の改善を得ることが期待できる。3) 痛みセンターのリーフレット作成と慢性痛の可視化に繋がるリーフレットは患者の慢性痛に対する理解の深まりと同時に不安と恐怖に繋がる可能性がある。

F. 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載。

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) Kato J, Baba M, Kuroha M, Kakehi Y, Murayama E, Wasaki Y, Ohwada S: Safety and Efficacy of Mirogabalin for Peripheral Neuropathic Pain: Pooled Analysis of Two Pivotal Phase III Studies, Clin Ther; 43(5):822-835. e16, 2021
- 2) Kato J, Inoue T, Yokoyama M, Kuroha M.: A review of a new voltage-gated Ca²⁺ channel $\alpha_2\delta$ ligand, mirogabalin, for the treatment of peripheral

2. 学会発表

- 1) 加藤実: 鎮痛薬を使いこなす、シンポジウム1 慢性痛患者に対する鎮痛薬を使いこなす: 日本ペインクリニック学会第55回大会:2021. 7. 23. 富山市
- 2) 加藤実:線維筋痛症の病態解析の最前線シンポジウム1 線維筋痛症の病態に基づいた対応を目指して: 日本ペインクリニック学会第55回大会: 2021. 7. 23. 富山市
- 3) 加藤実:小児の疼痛治療 シンポジウム5 慢性痛患児に対する情報収集と評価・痛み対応: 日本小児麻酔学会第56回大会 2021. 10. 17. 仙台市

H. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし